

日本創造学会

JCSNEWSLETTER

第38回日本創造学会研究大会を終えて



比嘉佑典 大会実行委員長

名桜大学サクラウムに集う参加者の皆さん

遠い南の島のさらに奥に位置する山原(やんばる)の公立大学法人・名桜大学で、2016年11月5日～6日、第38回日本創造学会研究大会in沖縄が行われ、無事に「沖縄・ガジマル大会」を終了することができて、実行委員長としてホッとしているところです。

学会会員が3人しかいない現地での大会は、まず人集めに苦労しました。学識者だけの集まりには期待できず、大会テーマを「沖縄の地域再生・活性化と創造力の展開」と銘打って、地域の人々を動員する形となりました。そのため、本来の研究大会としての学術研究発表を充実させることができなかったことを反省しています。

本大会は、せっかく地元の大学で行うので、学生たちの地域貢献活動について計画し、会員の皆様からアドバイスを受けるという「特別企画」を組みました。参加学生の「創造学会研究大会」体験は、彼らに大きなインパクトを与えてくれたようです。大会後、さっそく参加学生の交流と活動報告会を毎年持つことになったようです。

今大会のテーマは、沖縄の地域にとって最もふさわしいテーマだったと思います。参加された地域の方々は、もっと広く知らせるべきだったと感想を述べていました。大学にとっても、地域貢献型大学として大学の地域活動に大きな励みになったと思います。

私事になりますが、大学の理事長時代に建設した学生会館「サクラウム」で、本大会を開催することができたことは、この上もない喜びであります。日本創造学会の元理事長及び名誉学会長の栄誉をいただいていることから、ぜひ沖縄で一度大会を開催したいとの希望していました。そのことが実現して、今は感慨無量というところです。

ともあれ、名護市の夜景を眺望する懇親会は、にぎやかで、沖縄らしい自由な懇親会となりました。懇親会こそ沖縄仕込み「イチャリバチョウデー」(出会えばみな兄弟)の雰囲気でも盛り上がり、皆様には南の島の情熱の花をおみやげに持ち帰ったのではないかと想像しています。

遠隔地での大会で、事務局の比嘉さんは大変苦労なさったことでしょう。大会当日は親子で頑張ってくれました。おかげさまで大会を成功裏に終わることができ、比嘉さんには深く感謝申し上げます。

今日(ちゅう)の誇(ふくら)しゃや 何物(むぬ)に喩(あ)られん

上下(かみしも)そろって 三線踊(う)って サンサ踊(う)って遊(あ)しば

めでたい めでたい スリスリめでたい めでたい めでたい

琉球民謡「めでたい節」より

● 基調講演 ● 「健康と生きがいのあるコミュニティづくり ートータル医療の立場からー」



講演者の宮里好一先生



5日の基調講演では、日本創造学会会員で医学博士・医療法人タピックグループ代表の宮里好一先生に「健康と生きがいのあるコミュニティづくりートータル医療の立場からー」の講演を頂きました。医療、介護、健康、スポーツ、カルチャー、リゾートホテル等を総合した、21世紀のトータル医療を目指すユニークで総合的・画期的な取り組みについて語っていただきました。

● 名桜大学学生グループによる地域おこしと活性化の活動プレゼンテーション ●



6日の午前のプログラムでは、名桜大学の学生グループの活動についてのプレゼンテーションが行われ、生き生きと頑張る学生たちの取り組みが紹介され、各専門家からのアドバイスをもらいました。



それぞれの専門的立場から学生にアドバイスをするアドバイザー：写真左から山浦晴男氏、國藤進氏、澁谷貞子氏、高橋誠氏、樋口健夫氏

● 特別講義 創造性開発から見た新たな地域おこしと活性化への提言 ●



國藤進氏

「ミニ移動大学」の活動から
みた地域おこしへの提言



山浦晴男氏

地域再生と寄りあいワーク
ショップの実践

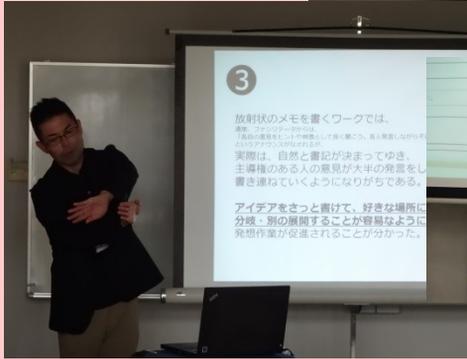


樋口健夫氏

アイデアマラソンで住民全員の創造性を向上させ地域再生の基盤を
造る

6日の午後、創造性開発から見た新たな地域おこしと活性化への提言と題し、北陸先端科学技術大学院大学名誉教授・客員教授の國藤進氏、情報工房代表・千葉大学大学院看護学研究科特命教授の山浦晴男氏、アイデアマラソン研究所代表・博士の樋口健夫氏がそれぞれの立場から特別講義を行いました。

発表風景



懇親会・交流会風景



乾杯の音頭をとる宮里・比嘉両氏



懇親会で親交を深める参加者の皆さん



マカオ、台湾、韓国からの参加者にインタビューする徐会長



懇親会場でプレゼンする地元の若者



櫻井理事長と歓談する参加者



地元の方々との交流会

学会賞授賞式

11月5日総会会場にて、学会賞を受賞された方の表彰式が執り行われ、櫻井理事長より表彰状と記念品が送られました。授賞式には4名の方が出席されました。(欠席の受賞者には表彰状と記念品を郵送)



2016年度論文誌Vol.19
奨励賞 古川 洋 章氏
共著者:川路崇博氏
由井菌隆也氏

論文タイトル:
「分散ブレインストーミング
におけるフィードバック視
覚化機能の順序効果」



2016年度論文誌Vol.19
奨励賞 澤 聡美氏
共著者:三浦光司氏
竹村 哲氏

論文タイトル:
コミュニケーション能力を向
上させるための関わりを重視
した創作ダンスのデザインに
関する研究



第37回研究大会発表賞
受賞者 西尾未希氏

発表タイトル:
「感動経験構造を用いた
コンセプト設計方法論」



第37回研究大会発表賞
特別貢献賞
受賞者 上田 宏氏

発表タイトル:
「30年前の自撮り棒発明
と最近の自撮り棒流行」

欠席された受賞者の方

第37回研究大会発表学生賞 谷岡遼太氏
第37回研究大会発表賞 片岡敏光氏

発表タイトル:研究室全員で取り組むアイデアマラソン
発表タイトル:イノベーションを推進する人財と組織

●●● 第39回研究大会についてのお知らせ ●●●

2017年度、第39回日本創造学会研究大会は9月9日(土)-10日(日)、慶應義塾大学日吉キャンパス(神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1)で開催されます。

例年より早い9月開催となりますので参加申込・論文投稿締切が早まります。

2017年Newsletter・ホームページでご案内しますので、参加・発表を予定して
る皆様はご留意をお願い致します。

▼▼▼ 総会報告 ▼▼▼

2016年11月5日、会員総会が開催され2015年決算・事業報告、2016事業活動状況、2017年活動予定、2017年予算案、次期役員人事などの項目について理事会より提案・報告され、会員の皆様の賛成多数で承認・可決しました。

2015年度収入

科目	予算額	実績額	備考
前年度繰越金	1,944,458	2,546,420	
会費収入	1,467,500	1,902,000	前年度未回収分 入会金・年会費 退会者納付分合算
その他収入	210,000	227,639	論文掲載料 論文誌等販売収入
合計	3,621,958	4,676,059	

2015年度支出・繰越額

(スペースの関係で総額のみ表示しています)

	収入額	支出額	繰越額
収支	¥4,676,059	¥1,977,403	¥2,698,656

2017年度予算

収入		支出	
2016年度繰越分(監査未終了概算)	¥2,332,686	大会費	¥500,000
会費収入(会員数からの概算)		会議費	¥90,000
内訳		研究会補助費	¥420,000
正会員195人×10000円×70%	¥1,365,000	交通費	¥130,000
学生会員25人×5000円×70%	¥87,500	送付費	¥80,000
賛助会員1団体 30,000円	¥30,000	学会誌	¥250,000
海外会員7人×5000円×70%	¥24,500	NL・メディア作成費	¥250,000
新入会者入会金約15名分 (2000×10、1000×5)	¥25,000	事務局費	¥350,000
論文掲載料	¥130,000	名簿台帳類管理費	
販売等雑収入	¥42,000	(規約、名簿、会費収納簿、ITアドレス等管)	¥200,000
		ホームページ管理費	¥110,000
		事務所設備費	
		(光熱費、PC回線使用料、OA機器使用保)	¥120,000
		学会賞準備費	¥30,000
		電話使用料	¥30,000
		国際会議準備費	¥200,000
		予備費	¥1,276,686
	¥4,036,686		¥4,036,686

▲▼▲第45回クリエイティブサロン (2016年9月17日)開催報告▲▼▲

第1部講演会: 「ニート・引きこもりを招く、高校中退の現状、その解決策」

講師: 杉浦 孝宣 (NPO法人 高卒支援会 代表)



教育理念

子ども達が規則正しい生活をし自信を持ち自律し社会に貢献できる未来を実現する

【3つの条件が揃えば立ち直る！】

約50年前、自身の不登校の立ち直り経験と30年以上に及ぶ、不登校、高校中退者に対応して来た経験則として、3つの条件 ①生活リズム改善 ②勉強に対する自信 ③環境(人間関係)改善 が揃えば、子ども達はほぼ、立ち直ります！

【高校中退の現状】文科省の統計によれば、高校中退者は年間、6万人。20年以上も前から同省は統計調査しており、高校中退者の60%が高校一年生の時期。高校中退＝中卒となり、ハローワークで、求人が少なく、高校卒業は最低限の社会保障のカギとなっている。高校中退、フリーターを経て、引きこもりとなる人は内閣府調査によると、昨年度の引きこもりは54万人。不登校→高校中退→フリーター→引きこもりと負の連鎖を断ち切る必要がある。

【高校中退の理由】高校中退の理由の大半が「高校で勉強する意味が分からない」等、高校進学したものの、無気力で辞めてしまうケースが多い、当会では第一に不本意入学(第一志望の高校を落ちて)して、転校希望者、不祥事(法律違反、芸能活動)、校則違反、スポーツ推薦、成績不振など、様々。

【高校中退対策】無気力で高校を辞めてしまう対策としては幼児期からのキャリア教育が必要。また、高校中退の理由も様々で、本人がやる気があれば、やり直せる、高校への再入学、学び直しの制度を整備すべきと考える東京都立高校は学び直しのために学期毎に補欠募集で高校再入学の機会を全国に先駆けて行っている。

【ご協力をお願い】当会の相談者は保護者からが多く、中々、本人から問い合わせは少ない。お知り合いで、不登校・高校中退・引きこもりで悩んでいる方がいらっしゃいましたら、是非、当会を紹介して下さい！

現在、LEC東京リーガルマインド様、養老乃瀧様が無償教室提供を頂いておりますが、いずれも月から金までの17:00までです。土日の相談会場、平日の17:00～22:00の個別教室を探しております。

テナント料無料は授業料を更に安くでき、より多くの子ども達を救えることに繋がります。

ご協力宜しくお願いします。

(記事: 杉浦孝宣)

第2部講演: 「創造性の未来」フューチャーセッション」

講師: 野村 恭彦 (株)フューチャーセッションズ 代表取締役 / 金沢工業大学(KIT)虎ノ門大学院 イノベーションマネジメント研究科 教授)

企業での新規事業創造や地方自治体での地域活性化など、様々な場面で社員や市民が組織の壁を越えて集まり対話し、アイデアや協業を生み出していくワークショップ活動が盛んである。しかし、その問題を解決するための「ステークホルダーは誰なのか？」という視点が欠けているところがある。フューチャーセッションの最大の特徴は、既存の問題や課題を再定義することで、「このステークホルダーが協力し合えば変化が起きるだろう」という、新たなシステムの箱庭をつくることである。(株)フューチャーセッションズは、フューチャーセッションを次のように定義している。

“未来の新しい仲間を招き入れ創造的な対話を通して、未来に向けての「新たな関係性」と「新たなアイデア」を生み出し、新しく集った仲間同士が「協力して行動できる」状況を生み出すための場”

フューチャーセッションでは、既存の問題の当事者だけでなく、非当事者も交えて、「未来思考」で対話する。そして、今までにはなかった協力関係を生み出していく。未来思考は、多様な「未来の仮説」を生み出したうえで、その仮説が成り立つための成立条件を未来から振り返って予測する「バックキャスト」を基本としている。そのため、多様なステークホルダーが持つ、それぞれの想いや願いが発想の起点になる。

この日のテーマは、「2022年 日本の創造性の未来」。非正規雇用の増加、複業、定年延長、女性活躍、ワークシェア、地方創生、AIの進歩などが「創造性のあり方」を大きく変えていくであろう。そのなかで、日本の創造性の未来を考えることで、ビジネスや教育のあり方を再考することを目的として、短時間のセッションを行い、下図のように「日本の創造性のあり方」について、4つの異なるシナリオを生み出した。それぞれのシナリオの世界観で求められる、異なるタイプの創造性をいかに育んでいくべきか、今後も学会で議論していきたい。

(記事: 野村恭彦)



2022年「日本の創造性の未来」4つのシナリオ



▲▼▲第46回クリエイティブサロン (2016年 12月 3日)開催報告▲▼▲

第1部講演会: 「世界が注目する、デンマークのビジネスデザインスクール、KAOSPILOTとは?
- 未来を創るクリエイティブリーダーシップ -」

講師: 大本綾 (株)Laere/ Laere Inc.共同代表 Creative Process Designer)



大本氏は世界が注目するデンマークのオーチスにあるビジネスデザインスクールKAOSPILOTの修学体験を述べられた。ここの特徴は、不確実で混沌したカオスな状況でも、パイロットのようにナビゲートできる人材を育成している。創学の動機は、ベルリンの壁崩壊後の若者失業者増加に起因している。カオスな中でもポジティブな社会変革を起こす人材を育てるためだった。要点は、討論の中で自分を見いだすといつても良い。「学びをデザインする」と氏は述べるが、車座の討論の中で自分の意見を推敲し、新たな自分を発見していく。机と黒板の教室はない。異国人、異文化人35人のブレインストーミング形式である。発想のプロセスは、探求-実践-創造-実行-内省であり、教科書ありきではない。例えばドラッカーの本を渡されたとしても、それを携えてキャンプ生活をし、討論するなど、実践を優先する。

Enterprising leadershipの育成がKAOSPILOTの目的であるから先人の学びではなく、自ら学びを開発していく。基本線としては、プロジェクトデザイン、プロセスデザイン、ビジネスデザインについて自分の考えを構築していく。卒業前には、自ら企業と交渉し、4ヶ月のインターンをしながら、自分の考えを元に企業を活性化する試みをする。卒業試験は、その結果について口頭試問を受け、レポートを提出することである。体験からくる学びのプロセスをまとめると、実践-内省-理論-学びとなる。実践とは崖から落とさせる如く、厳しい環境に挑まされ、自問自答をしながら苦しみ、やがて理論という梯子を見つけ、納得した時に学びが成立すると語る。 (記事: 田村新吾)

第2部講演: 「イノベティブ・プランニング」

講師: 田村新吾(日本創造学会理事・株)ワンダーワークス代表)



今回は、多くの発明をしたソニーの発想法についてワークショップを行った。

江崎玲於奈氏が、ソニーを評して「Well organized chaos」と言ったことがある。ソニーは混沌の中から糸を紡ぐように新発明を繰り返した。その原動力は社員の長所を巧みに組み合わせ発想と実用化の歯車が回転する経営を作り上げたからである。

人づくりについては、個性ある人材の採用と個性を生かした育成であった。その主な方法は、自力をつける「段階的強化法」、自発性を促す「隗より始めよ法」、自立力をつける「配転築城法」そして独自性をのばす「長所伸長法」がある。その上で発想が出やすい環境を作った。個人に対しては、頭のこわばりをなくす「脳壁破壊」習慣と、家で発想しても、発想した直後に作業台に座れる時空無用の職場環境があった。その結果、気宇壮大な目標を立て、あえて困難な問題に挑んだ。問題解決にあたっては、組織を越えた相互お節介、メンターを通して部課を超えた知識の結合などの「人的結合」を戦略的に行うことで難問解決し、発明に至っている。例えば、社員数400名弱のころに手作りでトランジスタを開発し、世界初のポケットブルラジオを発明するなどが好例である。

今回のワークショップは、脳壁破壊を意図したワークショップを行った。最初に客観的に見た自分の長所の見つけ方の紹介をした。その上で、各々頭のこわばりの原因をポストイットに記述し、一覧整理した。その一覧表の原因を全廃し、何でもオーケーの脳にしてブレストに進んだ。「無一物中無尽蔵」という禅語の心境である。ブレストでは、店頭のレジにまつわる「不自然」探しを4人一組でポストイットに書き、KJ法で整理して、特に重要な不自然の山を解決すべく気宇壮大な案を出し、発表してもらった。レジ前の列、手続き、レシート処、理誤計算、万引きなどの問題指摘があり、レジの無人化案、ユビキタスレジ、レジ兼用のカゴなどユニークな発表があった。 (記事: 田村新吾)

第47回クリエイティブサロン開催のお知らせ

開催日:2017年1月28日(土)13:00~17:00 会場:近畿大学東京センター



第1部

講演会講師:有賀三夏 氏

画家、アートセラピー研究者、東北芸術工科大学 創造性開発研究センター研究員・講師

講演テーマ:『多重知能理論から芸術思考へ』

私は、芸術という領域からの「創造」のプロセスを探っています。多重知能理論(Multiple Intelligences = MI)とは、ハーバード大学のHoward・ガードナー博士が提唱した理論で、現在は世界中の教育の場、ビジネスの場で用いられています。人間には誰にでも8領域の知能があり、それは生活する環境や文化によって人それぞれで使い方が異なるという考え方です。

近年、私は明治大学の阪井和男教授と、アートを創作する際の創造プロセスを「芸術思考」と呼び、裏打ちとしてMIを用いています。「芸術思考」が発揮される環境を説明していくことで、ともすれば理解されにくい創作活動の意義を提示することができ、更には“創造力と想像力が必要とされる創作活動”の活用性を提案し、紹介していくことで、社会にとっての芸術の必要性を革新できるのではないかと考えています。今回の講演では、人々を豊かな創造性に導くためのMI理論と芸術思考の関係をお話しさせていただこうと思います。



阪井和夫講師

第2部

WS講師:阪井和男氏 明治大学法学部教授・理学博士

問題提起者:小粥幹夫氏 日本創造学会評議員・工学博士

WSテーマ『2時間でできる創造的グループ思考:交流制約法TCoM』とそのワークショップ「アクティブ・ラーニングが日本の教育システムに根付くには何をなすべきか」への適用

創造的なワークショップの原理は、発散収束思考ではなく「収束発散思考」にあります。これまで創造性のプロセスモデルとされてきた思考の発散収束モデルでは、はじめに思考を強制的に発散させてから収束させます。しかしこの方法では、アイデアが既存の枠のなかに収束してしまいがちで、あまり創造的なアイデアに行き着きません。

これにたいして「収束発散思考」では、はじめに究極の理想解に向けてその必然性を徹底的に検討します。これは創造の前の「産みの苦しみ」に対応するもので、次のステップで発散思考に移った途端、爆発的な創造的アイデアが花開くのです。

「収束発散思考」にもとづく交流制約法(TCoM: Transactional Constraint Method)は、多様なバックグラウンドをもつ参加者が一人の課題定期者のために知恵を絞る共創のワークショップ技法です。本気で問題を解決したいと思っている人の課題をグループでもみほぐし、新しい気づきと解の創出を共創します。わずか2時間ほどで知恵が湧き出してアイデアが結晶化していくさまを体感しましょう。



小粥幹夫氏

《スケジュール》

- 12:30 開場
- 13:00-14:30 第1部講演会(質疑応答含)
- 14:30-14:45 休憩・開場整備
- 14:45-17:00 第2部ワークショップ
- 17:30~ 別会場にて懇親会

会場:近畿大学東京センター 大会議室
所在地:所在地:東京都中央区八重洲1丁目8番16号新槇町ビル13階

JR「東京駅」八重洲中央口 徒歩1分
八重洲地下街 地下18番出口

東京メトロ銀座線・東西線「日本橋駅」徒歩5分

東京メトロ丸の内線「東京駅」徒歩10分

都営浅草線「日本橋駅」徒歩7分

参加費: 会員/無料 非会員/参加費1000円

※懇親会(希望者)は4,000円程度の実費

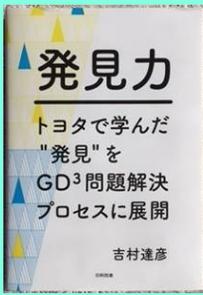
※参加希望の方は、学会ホームページより、メールでお申し込み下さい。

[氏名/所属/会員or非会員/懇親会参加の有無]



近畿大学東京センター周辺地図

会員著作紹介



『発見力 トヨタで学んだ“発見”をGD3問題解決プロセスに展開』

吉村達彦著 日科技連出版社 3564円(税込)

筆者は日本創造学会に設立初期から参加し、創造的な仕事の進め方について議論をしてきた。創造性研究の対象は、品質・信頼性の分野で、最も管理的な業務と言われている領域である。これまで、この領域の仕事を創造的に行う方法について筆者は3冊の著書を著しその手法は広く製造業の設計者に用いられている。今回はその集大成として『発見力』と題して、すべての仕事の中心に発見を持つてくる必要性、それを実行するための考え方、具体的な手法について述べている。目標だけを目指して、管理を徹底的に行うことにより、品質を確保する仕事から、発見を中心にする仕事へ、大改革を行う一助になればと思っている。(吉村達彦)



『発想する底力』 博報堂生活者アカデミー 中村隆紀著 日本経済新聞出版社

1620円(税込)

第四次産業革命…破壊と創造が加速する時代に、短絡的ハウツーや停滞した論理の習得では、自ら革新を主導するクリエイティブな「知の底力」が育まれません。本書は、創造的な発想体質を磨き、社会に寄与したい人材に向けて2016年5月に開講した、[博報堂生活者アカデミー]のマニフェストです。主題においては、企業哲学である「生活者発想」を基盤に据え、目先の個別業績やビジネスモデルを越えた、暮らしの目的創造(ライフモデル・シンキング)が、これからの未来創生の起点となることを提案しています。研究者、経営者、ビジネスリーダーなど大きな視点から創造性向上を考える方への「新しい学問のすすめ」です。(中村隆紀)



『社長のための経営ハンドブック2017年版』 日経BP社 8640円(税込)

第2章 イノベティブ・マーケティング 田村新吾(共著)

構造変革時代のマーケティングの方法について平易な言葉で著した。高齢少子化などの課題こそビジネスチャンスとみる陽転発想や「改革と伝承」の見極めというイノベティブな経営のあり方から始まり、既存のモノの結びつけでもイノベーションが起こせるという発想論、さらに不自然な発見がイノベーションのきっかけと話を進めた。そして、ものづくりの台本になる商品企画書の要点を解説、とくに顧客をよりフォーカスした「必需客」と「追従客」に分け、商品価値を「生活コンセプト」で表し、その作り方を事例をもって優しく解説した。(田村新吾)

創造性開発関連ツール紹介

「手塚キャラクター 発想支援カード」 紹介者: 山川 悟会員(東京富士大学)



一枚一枚に「鉄腕アトム」「ビッグX」「メルモ」など、お馴染みの手塚キャラクターと、その特徴に沿ったキーワード(「耐久性を10倍にする」「特化領域でNO.1になる」など)が記されたビジネスアイデア開発ツールです。東京富士大学と(株)手塚プロダクションによる地域産学連携によって開発されました。めくって出てきたキャラクターとそこに書かれたフレーズから、ゲーム感覚でアイデアを生み出すツールとして、ブレストやハッカソン、創造性教育などの場で活用することができます。既存の開発技法である「刺激語法」「チェックリスト法」「スーパーヒーロー法」などが組み合わせられたものと位置づけられるでしょう。これを使えば、マンガの神様・手塚治虫氏の創造精神に少しでも近づくことができるかも知れません。

1/27(金)に東京富士大学にてカードを使ったワークショップが開催されますので、詳しくは同校のwebサイトをご確認ください。

「猫の手」アイデア専用メモ用紙 紹介者: 石井力重会員(アイデアプラント代表・早稲田大学非常勤講師)



クリエイティブワークでは紙道具(ポストイットや模造紙)を大量に使います。製造容易性を度外視すれば、それらよりもアイデア出しをより捗らせる紙道具ができるのではないかと考えました。そのデザインにチャレンジしました。試作とテストを繰り返して、最終的に、特殊な形状のメモ紙を開発しました。曲線を基調にした細長いフォルムで、一方の端に三又の分岐、もう一方の端に連結のための爪を持ちます。紙片の外見は、漫画風の猫の手に似たものになりました。そのまま「猫の手」と名付けました。小ロット製造し、大学の授業において96名の学生に使って

もらいアンケートを取り分析したところ、従来の紙道具にはないアイデア創出の促進要素が多く抽出されました。その上位群から「楽しさ、組み替え易さ、集団作業のし易さ」が重要だとわかりました。これら発見した要素をベースに、目下、別のデザインも開発しています。来春に公開・提供予定です。

国際会議報告

KICSS (Knowledge Information Creativity Support Systems) 2016



2016年11月10-11日、インドネシアのジョグジャカルタで第9回知識・情報・創造性支援システム KICSS 2016 が開催された。登録参加者は56名、参加国は5か国、投稿件数150件で採録件数は57件であった。今回はIEEEインドネシアの主催で、日本創造学会も共催であった。日本創造学会からの参加者は、昨年度に比べ、テロの影響で少なく、4名であった。筆者は名誉議長でオープニング・スピーチを述べた。特筆すべきは4名のBest Paper Awardに正会員の小出実東北文化学園大学教授が入ったことである。今回の特色はICT応用の創造性支援システムの研究が増えたこと、サービスサイエンスやイノベーションに関する研究が増えたことである。食べ物は美味しく、踊り見学も楽しめたが、スコールがすごかった。有名な世界遺産の街なので、見学を楽しんだ参加者も多い。

なお来年度は名古屋工業大学伊藤孝行先生のご尽力で、同大学で11月9-11日に開催される。創造学会からもオーガナイズト・セッションを期待されているので、奮って参加されたい。(記事: 國藤進)

第15回国際アントプレナーシップフォーラム(IEF)会議に参加して



会場の島(*会議資料)



会場にて(参加者の徐方啓)



ベネチアの風物詩

第15回国際アントプレナーシップフォーラム(IEF2016)会議は去る12月14日から16日にかけてイタリアのヴェネチアで行われました。同会議の組織者はイギリスエセックス大学ビジネススクールですが、設立の時から経済協力開発機構(OECD)にサポートされています。また、今回の会議の共催者は国際中小企業ネットワーク(INSME)です。同組織には現在37カ国の84の組織が加盟しています。

IEF2016の会場はヴェネチア国際大学のキャンパスです。小さい大学と思われていますが、実際早稲田大学を含む世界16の大学から構成される高等教育の国際研究センターで、しかもサン・セルヴォーロ島全体がキャンパスとなります。

今回の参加者は、34カ国から集まった110人ですが、地元イタリアの参加者は26人しかいないので、日本でなかなか見られない光景です。日本からの参加者は筆者と駿河台大学の高垣先生です。基調講演とパネルディスカッションの他に、43の口頭発表がありました。筆者は15日の午後(4:30~5:30)第2グループで司会を務めると同時に、「中国ベンチャーの新しい動向」を発表しました。(記事: 徐方啓)

◆◆◆新入会員紹介◆◆◆ (入会順)

氏名	会員種	所属	住所	専門分野
浪平博人	正会員		東京都	コンピューターアルゴリズム
城井信正	正会員	(株)シロイアソシエイツ	東京都	新商品企画/開発
三木康司	正会員	(株)enmono	神奈川県	製品開発論
石田泰博	学生会員	慶應義塾大学大学院 SDM研究科	神奈川県	顧客経験価値の創造



2015-16年度出版の著作賞のエントリーを募集します

著作賞の応募期間は2年毎で、今回の第6回日本創造学会著作賞は2015-2016年度内に発行された著作が対象となります。募集期間は4月末までの予定です。エントリーフォームはこのニュースレターの巻末に添付します。応募の著作や資料の返却はいたしません。（著作は希望者には1冊返却しますが、エントリー時にその旨を申し出て下さい。著作は査読者が精読しますので、新品同様での返却はできません。）

詳しくは、下記「著作賞選考規程」をご確認の上、ふるってご応募下さい。なお、2016年までの会費納入が確認できた会員のみ、応募資格があります。

日本創造学会「著作賞」選考規程

下記の「応募基準」を満たした全エントリー著作に関して、「学会賞委員会」が審議して候補を決め、理事会において承認し、ニュースレターで公知する。エントリー期間は、基本的に2年毎とする。受賞件数は著作の質に依存するので明確には定めませんが、概略、数件程度を目安とする。

[応募基準]

1. 応募の規定年度内に出版されたISBN取得の著作であること。
2. 単著または共著または編著・監修とする。共著の場合、応募者が第一筆者またはそれに準ずる内容量を担当した筆者であることとする。編著・監修の場合、応募者が編著・監修の筆頭責任者であることとする。
3. 著作の内容は、創造性研究・実践に関する学術的または実践的なものとする。
4. 年度ごとの同一著者によるエントリーは1件までとする。
5. 過去の著作を改訂した再版は応募資格があるが、増刷は応募資格なしとする。
6. 会費完納の会員であること。

[応募手続き]

I. 自薦の場合

1. 学会事務局より送付される、エントリーフォームに必要事項を記載し提出する。
2. 著作の概要をA4版2枚以内(3千字以内)にまとめたもの3部(著作のオリジナルな点を明記する)を提出する。
3. 審査用に著作を3冊日本創造学会に寄贈する。

※応募書類・著作・資料の返還は行わない。(著作返還希望者はエントリー時に申し出る)

II. 他薦の場合

1. 他者を推薦できるのは学会賞委員のみとする。
2. 他薦する場合、著者に推薦者より連絡をとり、両名のどちらかがエントリーフォームおよび自薦の場合と同等の形式で著作の概要を書き3部を提出する。
3. 学会への納本については、最低1冊は寄贈し、残り2冊については著者より借りる(寄贈でも良い)。
4. 他薦エントリーの場合、納本やエントリー条件を満たす書類の事務局への送付などは基本的に推薦者が手続きの責任を負う。
5. 学生会員も推薦対象になる。※応募書類・資料の返還は行わない。貸与された著作は著者に返還される。

[選考基準]

以下の点等に基づいて、選考する。

1. 学術的な価値の高いものであるか。
2. 実践的な価値の高いものであるか。
3. 創造性研究・実践の新たな地平を拓くものであるか。
4. 世界の創造性研究・実践に影響を与えるものであるか。
5. 受賞対象が共著・編著・監修の場合、著作中の本人執筆の割合も考慮し、評価の対象が執筆内容であるか、編集・監修の技術か等、選考委員会が妥当と思われるカテゴリーの賞を選定する。
6. 社会的評価の高いものであるか(下記の諸点に関して社会的評価がわかるものがあれば添付する)。
 - ・他者の研究に引用されている。
 - ・基調講演やシンポジウム等の文献となっている。
 - ・新聞・雑誌等の書評で紹介されている。
 - ・海外で翻訳されている。
 - ・インターネット等で言及がある。
7. 応募著作により、学術部門と啓蒙部門に分けて選考することができる。
8. 著作賞の質を守るために、「該当なし」の結論になることもある。

事務局メッセージ

沖縄県名護市の名桜大学で開催された第38回研究大会は遠方にもかかわらず、2日間でのべ107名の皆様にご参加頂きました。内地から、沖縄の地元から、アジアの国々から、人々が集い、夏のように汗ばむ陽気の中、気温だけでなく人の心もあたたかい、思い出深い大会となりました。

2017年の大会は慶応義塾大学日吉キャンパスで9月に開催されます。例年より早いペースで準備が進みます。創造性研究の新しい潮流を実感できる大会となることでしょう。(事務局:比嘉)

日本創造学会 ニュースレター

2016年12月発行 (№4)

日本創造学会事務局

発行人：櫻井敬三

編集担当：比嘉由佳里

〒272-0015 千葉県市川市鬼高

4-7-6-816

Tel 080-3465-6152

Fax 047-314-6380

e-mail: jcs-info@japancreativity.jp

<http://www.japancreativity.jp/>

日本創造学会第6回著作賞エントリーフォーム (2015年－2016年出版)

氏名	印	所属
いずれかに○ (単著 / 共著 / 編著 / 監修)		住所
書名		電話 ()
		E-mail @
出版年月日	20 年 月 日	出版社名
応募部門	一つに○ (学術部門 / 啓蒙部門)	
著作推薦の理由		
<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>		

日本創造学会著作賞は応募基準を満たし、適正な応募手続きによりエントリーされた著作を対象に、学会賞委員会で厳正な審査を行います。